

北九州市 ほかんけん 保環研だより



《発行》北九州市保健環境研究所

所在地

北九州市戸畑区新池 1-2-1

ホームページ

<https://www.city.kitakyushu.lg.jp>

/ho-huku/ho-kenkyuu.html



◆ トピックス：細菌部門 ◆

加熱不足の鶏肉料理にご注意！

食中毒の原因菌、カンピロバクターについて



鶏肉のタタキなど、十分に火が通っていない鶏肉料理が原因で食中毒になるケースが多く見られます。その犯人は「カンピロバクター」という細菌で、国内で発生している細菌性の食中毒では常に上位を占めており（令和5年事件数・患者数ともに1位、令和6年事件数1位・患者数2位）、毎年約300件、患者数は2,000人程度発生しています。また、北九州市でも同様にカンピロバクターが食中毒の原因菌となった事件が多く見られます。

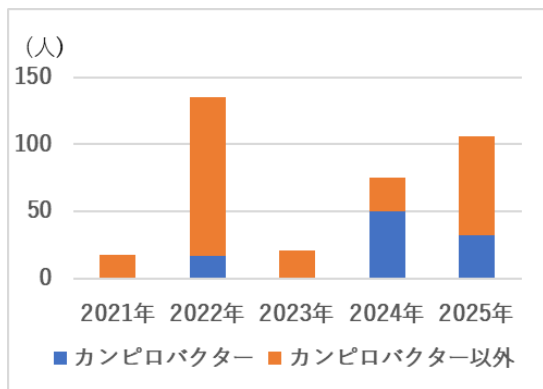


図1 北九州市で発生した食中毒患者数

【カンピロバクターってどんな細菌？】

カンピロバクターは、鶏や牛、豚など多くの動物の腸内に生息する細菌です。幅0.2~0.8 μm、長さ0.5~5 μmの細長いらせん状のグラム陰性桿菌です。

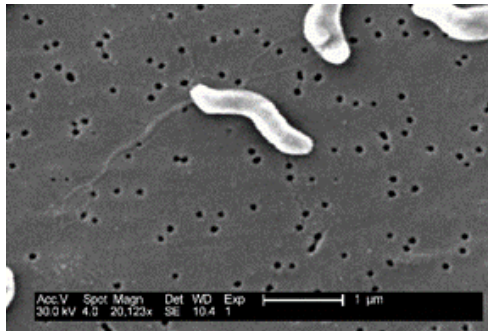


Photo Credit: Janice Haney Carr
Public Health Image Library (PHIL)

図2 カンピロバクター電子顕微鏡写真

カンピロバクターは微好気性細菌で、酸素濃度5~15%で増殖し、乾燥に弱い、熱に弱いという特徴が

あります。また、少しの菌数（数百個程度）でも食中毒を引き起こす可能性があり、カンピロバクターが付着した鶏肉などは新鮮でも加熱が不十分のまま食べると、食中毒にかかる危険性が高くなります。

カンピロバクターによる食中毒を防ぐには、熱に弱い特徴を生かした「食肉を十分に加熱調理（中心部を75℃以上で1分間以上加熱）すること」が、最も有効な方法です。



【カンピロバクター食中毒の症状は？】

カンピロバクターによる食中毒の症状は、菌に汚染された食品を食べた後、通常1~7日（平均2~3日）で現れます。主な症状は、激しい腹痛、下痢、発熱、だるさ、頭痛などです。まれにですが、カンピロバクターに感染した数週間後に、手足の麻痺などを引き起こす「ギラン・バレー症候群」という重い病気になることがあります。

【食中毒になった時の検査は？】

食中毒の原因を究明するために、患者便や食品から原因となる食中毒菌を検出するための検査を実施しています。

図3に、当研究所における標準的なカンピロバクターの検査方法を示しました。

カンピロバクターは増殖速度が遅く、大腸菌の倍程度と言われています。そのため、かつては検体搬入から食中毒の原因菌をカンピロバクターと確定するまで、一週間以上を要することがありました。現在は、確定試験にPCR試験を取り入れたため、5日程度で確定できるようになりました。

食中毒の検査は、検体の中に潜む食中毒の原因菌を増殖させ、菌種を突き止めることを基本とするた

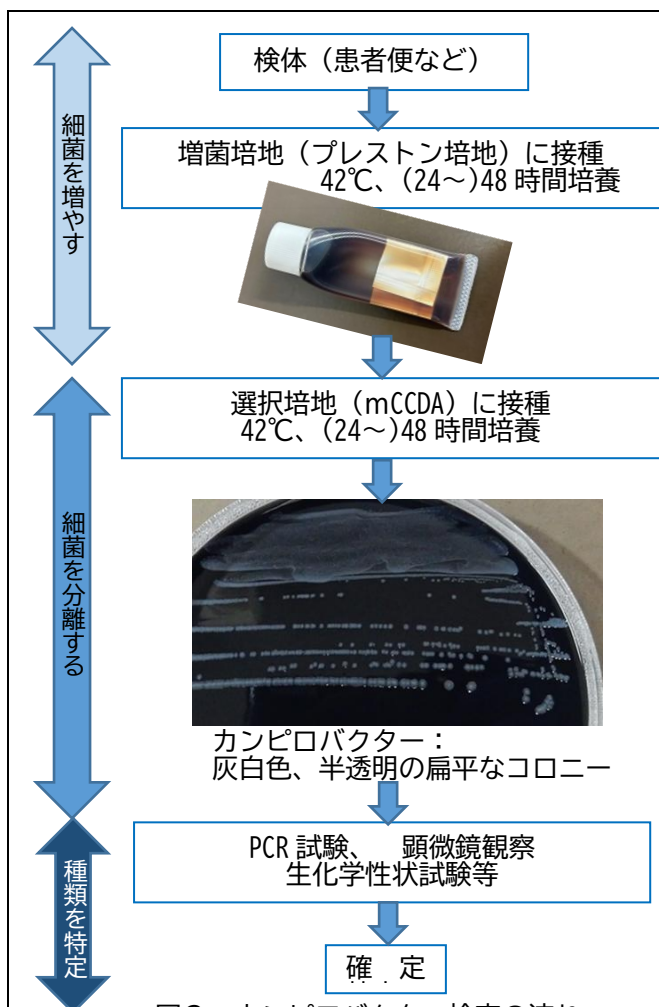


図3 カンピロバクター検査の流れ

め日数を要します。少しでも早く検査結果を出せるよう、日頃から新しい知見や検査法等の情報にアンテナを張り、導入に努めているところです。

◆ コラム1：令和7年度保健福祉研究発表会が開催されました ◆

保健福祉局では、保健福祉関係職員の公衆衛生や社会福祉に関する研究心を高め、自己啓発を奨励する目的として、平成元年度から「保健福祉研究発表会」を開催しています（今年度で37回目）。今年度も1月29日に発表会が開催され、優秀賞5題、入選5題が決定しました。

保環研からは3題提出、そのうち2題が一次審査（書面審査）を通過し、発表会に臨みました。

この中の1題「調理後における温度管理の重要性の検証～ウエルシュ菌食中毒を防止するために～」が優秀賞を受賞し、今年5月に行われる第73回福岡県公衆衛生学会に進むこととなりました。

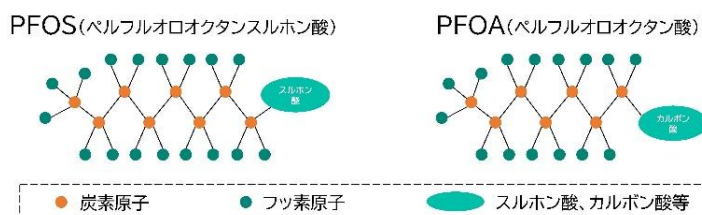
保環研における調査研究の取組みを広く知ってい

ただくとともに、その成果を行政施策に活用できることは、職員のモチベーションの向上に大いに役立つものと思っているところです。

◆ コラム2：PFAS 勉強会に出席しました ◆

地方自治体の研究所は、検査技術の向上や情報交換を図る目的で、国や他自治体との連携を推進しています。今回、九州・沖縄地域における連携事業の一環として、全国的にも大きな問題となっている有機フッ素化合物（PFAS）に関する勉強会が開催（令和8年2月13日、大分県主催）され、本研究所からも職員が出席しました。

勉強会では、PFASに係る最新動向や調査事例の紹介、さらには分析方法の解説や課題・問題点などの説明があり、その後、質疑応答が行われました。



出典：環境省 HP PFAS の基礎知識より

図4 有機フッ素化合物の構造

出席者からは、「PFAS 分析の難度の高さを再認識した」、「分析法の解説、事例紹介等、非常に学びの多い発表ばかりだった」「質疑応答でも参考になる意見が多く有意義であった」などの意見が聞かれ、大変、充実した勉強会となりました。

今回、学んだ知見や他自治体とのネットワークを今後の PFAS 分析に活用したいと考えております。

編集後記

今回、初めて生成 AI を活用して「保環研だより」の編集を試みました。グラフの作成や引用可能な写真の検索、文章の構成、さらには専門的な用語を分かりやすい表現に変換するといった作業を瞬時に行い、これまでよりも作業時間が大幅に短縮されました。「習うより慣れろ」のことわざにもあるように、他の業務にも積極的に活用してみたいと感じたところです。